

【調査・事業報告】

三島由紀夫「橋づくし」を読む・見る・歩く —講義・展示・文学散歩の記録と考察—

湯川 説子*

目次

はじめに

1. 講義編

- (1) 三島由紀夫と「橋づくし」
- (2) 「橋づくし」の物語
- (3) 作品のモチーフ

2. 展示編

～三島由紀夫「橋づくし」を読む・歩く～

3. 文学散歩編

- (1) 橋と遺構を巡る
- (2) 縁の地・築地

おわりに

キーワード 三島由紀夫 橋づくし 文学散歩 三吉橋 築地橋 入船橋 暁橋 堺橋 備前橋
土俗 皮肉 首都高速道路 劇場 聖路加国際病院 築地

はじめに

三島由紀夫（1925～1970）の作品は、小説、戯曲、評論の各分野にわたり、そのモチーフは、日本の古典のほか、歌舞伎や能、ギリシア神話、ニーチェ（1844～1900）をはじめとする哲学など、様々な領域に題材をとっている。三島が45歳で自決を遂げてからちょうど35年後、その生誕80年にもあたる平成17年11月、筆者は、江戸東京博物館の講座・えどはくカルチャーにおいて、作品「橋づくし」（昭和31年）を題材とした講義および文学散歩を実施した。また同時期に、常設展示室・東京ゾーン・近代都市生活コーナーでは「橋づくし」に関する特集展示を開催している。博物館では、資料や展示を媒介として、観覧者にメッセージを伝えることが可能である。同時に、教育普及活動として講座によってその文化的、歴史的背景の理解をより深めてもらう方法もあり、とりわけ文学を題材とする場合は、描かれた舞台を体感するという「文学散歩」という手法が有効であると筆者は考えている。近年、佐藤義雄

*東京都江戸東京博物館学芸員

氏も『文学の風景 都市の風景—近代日本文学と東京—』（蒼丘書林 平成22年）で、文学散歩によるテキスト読解の実践をうたっており興味深い。本稿は、筆者が実施した講義（平成17年11月1日（火）江戸東京博物館会議室にて 受講者数は13名）と文学散歩（同年11月9日（水） 受講者数は10名）および、これに関連する展示（開催期間は同年10月12日（水）～翌年1月9日（月・祝日））を通じて生じた考察と記録である。博物館における文学散歩のあり方のひとつを提言出来れば幸いである。なお講義・文学散歩ではレジュメを用意し、講義では、事前に文学散歩のコース上の風景写真も含めた、映像資料の提示も行った。まずは座学による講義の内容を、順を追って記してゆく。

1. 講義編

（1）三島由紀夫と「橋づくし」

写真1は、三島由紀夫が昭和35年に主演した大映映画「からっ風野郎」の撮影時のスナップである。三島の写真という気取ってポーズをとっているものが多く、笑っている写真は少ないのだが、珍しいことから講座の冒頭で紹介し、また展示室にも同じものを掲げた。展示室では、海外からいらしたと思われる観覧者がしきりに“Mishima”と言っているのが印象的であった。三島の作品が海外で高い評価を得ているのは、優れた翻訳の力と同時に、理知的な論理性と確かな構成力に支えられた物語によって日本の風土や文化を伝えた点にあると考えられる。それに加えて、前近代の武士のように「ハラキリ」をして死んだ、ということに、衝撃的な印象を抱く人が少なくないからであろう。



【写真1】 三島由紀夫肖像

これは日本人にとっても同じことで、1960年代以前に生まれた人ならば、昭和45年に起こった三島の自決の様子は、記憶に新しいことなのではないか。市ヶ谷陸上自衛隊に突入して決起を促すも果たせず、持ち込んだ日本刀で割腹、民間防衛組織である「楯の会」のメンバーに介錯をさせて絶命、この時の模様はテレビで生中継され、翌日の新聞にも掲載、一連の経緯はマスコミによって大々的に報じられた。三島が、なぜあのような最期を選んだのか、それは、戦後の日本社会に幻滅したから、作家として限界を感じたからなど様々な意見がある。美に憧れ、美を理解し、それを表現する方法を持っていながら、また、死と美¹⁾というのは彼の作品のテーマでもあるにも関わらず、自身の死についてはそれがひとつにならなかった。三島自身は、死によって自らが芸術そのものになろう、という意図があったかもしれないが、行動が思想を凌駕していった、いわば、人工の花である文人として生きるよりも、自然の花として散り急ぐ武人の道を選んだからと、その終焉を意味付けることも出来よう。

文学散歩を実施した平成17年当時、もしも三島が生きていれば80歳であり、日本の文壇に大きな影響を及ぼしていたかもしれない。筆者が取り上げた「橋づくし」は、三島作品の中でも珍しい花柳小説、花柳界を舞台にした物語であり、この特異な作品を通して三島由紀夫を理解する入口に立ってみよう

というのが、講座と展示の目的であった。さらには、昭和30年代の、東京オリンピックに向けての開発が進む以前の築地界隈を、文学散歩をしながら俯瞰しようということも考えていた。

「橋づくし」が、三島作品の中の唯一の花柳小説であることについて、自身、こう言っている。

小説「橋づくし」は私のほとんど唯一の花柳界小説であるが、もとより私共の年代は永井荷風の年代とはちがつてをり、何らのアイロニなしに花柳界を扱ふことはむづかしい。荷風でさへ「腕くらべ」は、明らかに冷笑的諷刺的作品である。

これは「橋づくし」が、昭和36年7月に、新派によって歌舞伎座で上演された際、三島が筋書（当館所蔵 資料番号96004533）に寄せた言葉である。²⁾ 明治後期の花柳界に詳しい作家の永井荷風（1879～1959）は、確かに「腕くらべ」（大正5年）などの作品で、花柳界の持つ江戸文化が明治の野卑な文明に侵食される様子を描いている。三島が言う「アイロニ」＝皮肉というのは、この考えを踏襲したもので、ここには「橋づくし」を読み解く重要なヒントが隠されていると思われる。その答えを見つけるため、講義では、受講者とともにストーリーを確認しながら、読み進めていった。

(2) 「橋づくし」の物語

物語は陰暦8月15日に、4人の女性が、築地川にかかる7つの橋を無言で渡り、願いを叶えようとする内容で展開する。この日は中秋の名月としても知られており、太陽暦で言えば9月の半ば、平成17年は9月18日であった。このあとの陰暦9月13日の月、十三夜にも月見をしないと片見月となること、同年の十三夜、10月15日は雨であったことなどを述べ、月に対してはさまざまな言い伝えがあり、物語の登場人物にも、何かしらの影響を及ぼしているのではないかという問題提起を行った。

陰暦8月15日のころは、気候もまだ寒くはないため、橋を渡る4人はそれぞれ、浴衣をまとっている。この浴衣地と、それぞれの願い事を下記のようにまとめてみた。

まずは白地に黒の秋草のちぢみを着た芸妓の小弓。5尺そこそこの小太りした体である。42歳のいわゆる老妓で、今まで誰にも頼らずに生きてきたというのが誇りであり、願い事はお金が欲しいということだ。

それから同じく芸妓のかな子、彼女は22歳。白地に藍の観世水を染めたちぢみを着ている。踊りの筋はいいのに良い旦那が見つからないことから、恒例の踊りもいつも端役ばかり。よって後ろ盾となる良い旦那が欲しいということになる。小弓とかな子は銀座板甚道の分桂家の芸妓である。分桂家は架空の置屋であるが、板甚道とは、現在の銀座8丁目付近、銀座日航ホテルやリクルートギンザ8ビルのある通りである。

3人目は、料亭・米井の箱入り娘・満佐子である。満佐子も22歳、かな子とは小学校が一緒だ。早稲田大学芸術科でプルースト³⁾を読んでおり、店に来た映画俳優のRと一緒にになりたいと考えている。彼女が着ている萩のちりめんは、花柳界では夏に萩の衣裳を着ると妊娠する、という迷信を信じてと作品の中に書かれているが、現実の花柳界でこうした俗説があったという確認はとれなかった。満佐子の性格

は勝気で、色事については臆病で子どもっぽいため、母親も娘が萩の浴衣などを誂えても気にもとめない、と記されている。

そしてもうひとりが、この料亭・米井の女中であるみなである。みなは東北から出てきたばかりの、やはり満佐子と同じ年ぐらいの年齢であろうか、その姿は、顔も腕も真っ黒で、ふくらみ返った頬の肉、目は糸のように細く口から乱朶歯がはみ出して、発育がいいなどと満佐子に馬鹿にされている。妙なありあわせの浴衣地で拵えたワンピースを着ており、この橋めぐりには、用心棒として参加することになる。何を考えているかわからないような姿のみな、実際このみなの願いは、物語の最後になっても明かされることはない。いったい彼女の願いは何であったのか、これについても、受講者に問いかけを行った。

この7つの橋についての俗信を、三島は赤坂の料亭で耳にして、赤坂では舞台となる橋が少ないため舞台を築地にしたという⁴⁾。しかし、実際に花柳界でそういったことが流行していたのかを確かめることは出来なかった。伝わっているのは、昭和33年にこの「橋づくし」が舞台劇として東京の明治座で上演されたことをきっかけに、橋を無言で渡る芸者が数多く現れ、原作の満佐子同様、警察の厄介になる者が絶えなかったという話である⁵⁾。

次に、作品「橋づくし」の橋めぐりのルールを確認した。陰暦8月15日の晩であるということ、すべての橋を渡り終えるまではしゃべってもいけない、知っている人から声をかけられてもいけない、同じ道を二度通ってはいけないので、もちろん引き返してもいけない、いわば一筆書きで橋を渡りきらねばならない、ということになっている。このルールをすべてクリアして7つの橋を渡りきり、願いを叶える権利を得るのは、物語では女中のみなひとりとなる。なぜこういう結末なのか、ここにも三島の隠れた思想が投影されているのだが、その説明をする前に、4人の歩いたコースを地図でたどることにした。

まず銀座板甚道の分桂家は口絵17（東京都別地図大鑑 中央区 資料番号00604390）-㊦のあたりである。小弓とかな子はここからスタートし、新橋の料亭・米井に向かい、そこで4人が揃う。この米井、三島はもともと『文藝春秋』（昭和31年12月号）掲載時には米川という名前で登場させていたのだが、実在する料亭であることから、単行本収録時に米井という名前に変えたという⁶⁾。米井を出発して4人は昭和通りに出、東銀座一丁目と二丁目の堺の道を右に曲がる。まもなく、はじめに渡る橋が見えてくる。江戸東京博物館所蔵の、昭和26年の築地界隈を記載した地図1（東京特別都市計画図 中央区（京橋） 資料番号00002521）に、渡るべき7つの橋を落とし込んでみた。第1の橋は三吉橋である。

口絵18は、江戸東京博物館所蔵の昭和初期の絵葉書（（東京大十六橋）三吉橋 絵葉書 資料番号88138258）だが、橋そのものの形態は、昭和31年にも大きな変化がないことから、参考資料として提示した。築地川の屈曲した地点には、楓川と結ぶ水路があ



【地図1】 東京特別都市計画図
中央区（京橋）（部分）
人文社 発行 1955年（昭和30）

るため、川筋がT字になっている。ここにY字型に架けられたのが三吉橋で、三又の橋であることから、「橋づくし」の登場人物は、ここで第1、第2の橋と、ふたつの橋を渡ることが出来る。竣工は昭和5年3月、関東大震災後の復興事業の一環として架けられたものであった。⁷⁾三吉橋の場所は、口絵17-④でも確認出来る。小弓、かな子、満佐子、みなのかは、まず、絵葉書の画面の手前にあたる橋の袂で手を合わせて祈願をする。橋の中央



【写真2】『復興記念写真帖』より三吉橋と京橋区役所
東京府 発行 1930年 (昭和5)

でまた手を合わせ、さらに右折して、中央区役所を背に祈念をする。渡るあとさきに手を合わせるのも、三吉橋では、合計4回手を合わせることになる。画面右側に見えるのが中央区役所の建物で、「橋づくし」には「陰気なビル」として登場する。当館所蔵の写真2 (『復興記念写真帖』より三吉橋と京橋区役所 昭和5年 資料番号88001269)の方がわかりやすい。この正面の建物、三吉橋の完成と時を近くして昭和4年9月に新築された京橋区役所で、昭和22年に京橋区と日本橋区の合併により中央区が発足、建物内に中央区役所が置かれた。この建物は昭和43年に解体、現在、同じ場所に昭和45年に完成した庁舎が立っている。⁸⁾平成17年当時の三吉橋付近の様子を口絵19に掲げた。文学散歩で受講者にも確認してもらったが、7つの橋の周辺は、作品執筆当時に比べて、たいへんな様変わりをしている。

4人は無事に第1、第2の橋を渡り、第3の橋、築地橋 (口絵17-⑤および地図1参照)に向かう。三島は「築地から桜橋へゆく都電の通りへ出た」ところに築地橋がある、と書いている。口絵17でもわかるように、築地橋には、都電の9番 (渋谷駅—新佃島)、36番 (錦糸堀—築地)が、昭和40年代に廃止されるまで運行していた。⁹⁾物語では夜も遅かったので都電は走っていない。小弓はここで、自分の願い事が7つの橋を渡ることそのもののような気がしてくる。かな子も満佐子も2つの橋を渡った時点で、願望の強さが増してゆく。登場人物のこのような態度—思想ではなく行動そのものが目的になる、あるいは行動することによって思想が限定されてゆく、という展開は、まさに近い将来、三島由紀夫がとることになる生き方につながるものと考えられる。

築地橋を渡ったのち、かな子が腹痛のため脱落。タクシーに乗って戻ることになるが、残りの3人はそのことに気がつかなかつたり、気づいても他人のために自分の願い事を犠牲にはしない。なお平成17年当時の築地橋を写真3にあるとおり掲げた。都電はもちろん通っていない。ところで、築地川は昭和35年から埋め立てが始まり、川の上には現在、高速道路が走っている。三吉橋や築地橋の真下は、地下鉄有楽町線の新富町駅である。

3人になったところで、次に渡るのは第4の橋、入船橋 (口絵17-⑥および地図1参照)である。入船橋の道筋は現在、新大橋通りとなっている。「橋づくし」では、ガソリンスタンドの燈火とは対照的に、屋形船や釣り船の看板を掲げた小屋の灯りが川面に影を落とす様子が描かれ、風情のあるシーンと



【写真3】 第3の橋 築地橋



【写真4】 第4の橋 入船橋

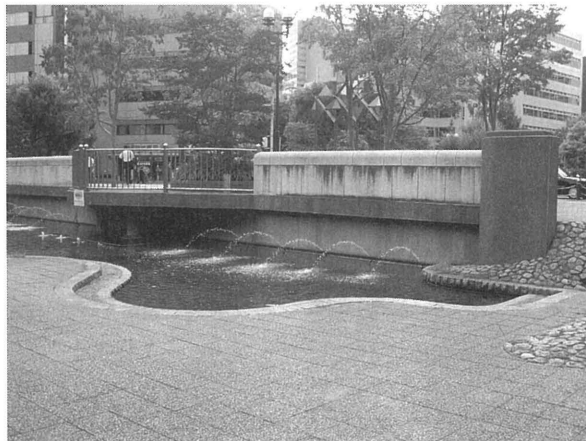
なっている。平成17年当時、入船橋はたいへんな交通量で、写真を撮るのに危険がともなった。よって築地川の埋め立てがわかるような写真4を撮影し、紹介することにした。

入船橋をはじめ、この7つの橋の映像資料、写真や絵はあまり多く見られない。つまりは、それだけありふれたものであり、改めて写真を撮ろう、絵に描こう、ましてや橋と川を保存しようという考えはなかったであろう。そのように考えると、よくぞ三島は書き残してくれた、と思うのだが、このことにも、三島の秘密が隠されている。この話も、受講者にはのちに説明することにした。

第5の橋は暁橋である。口絵17-④および地図1で場所が確認出来る。館蔵資料(『新版画』第3号より 築地あかつき橋 昭和7年 資料番号99200017)の橋が、作品に描かれた橋であることから、紹介した(写真5)。作者の武藤六郎(1907～1995)は、自画・自刻・自摺を实践した創作版画家による同人誌『新版画』の主要メンバー。創作版画は、明治30年代に山本鼎(1882～1946)が制作した、版画を刀画と呼んでいるところに始まりがある。刀画つまり彫刻刀の線がよく出ているということ、この作品にも作者の力強い筆致が感じられる。暁橋は昭和2年の架橋で、「橋づくし」では、奇抜な形の柱に白い塗料が塗ってある橋、として登場している。ここを渡りきろうとする時、小弓は知り合いの老妓から声をかけられ、脱落することになった。小えんという老妓は戦後しばらくお座敷に出ていたが、病



【写真5】 『新版画』第3号より 築地あかつき橋
武藤六郎 画 1932年(昭和7)



【写真6】 第5の橋 暁橋

を得て妓籍をひいたということで、うつろな様相で物語に登場する。月の満ち欠けを人の生死に例えることもあり、そこからの連想も考えられ、また、4人の浴衣の模様と月の組み合わせも、絵画的な情緒を醸し出すものとなっている。

4人が無事に7つの橋を渡れるか、というちょっとしたサスペンスに、我々読者はとらわれがちであるが、そもそも願いを叶えるために橋を渡るのは、陰暦8月15日でなければいけないこと、「本当に兎のいそうな月よ」という台詞

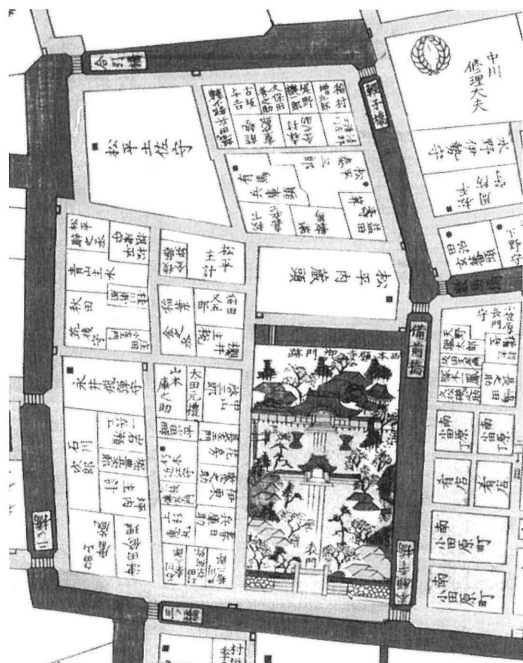
があったり、「月下の道を歩く三人を見れば、月はいやでもそれを見抜いて、叶えてやろうという気になるにちがいない」という記述があったり、この橋めぐりの願掛けは、終始月の輝きに左右されていることがわかる。入船橋で月が雲に隠れ、暁橋を渡る直前に雨が降り出す、という設定は、不吉な予言のようにのしかかってくることも説明した。

口絵17および地図1で確認すると、築地川は、入船橋を渡ったところでほぼ直角に右に曲がり、暁橋までは少し距離がある。写真6が、平成17年の暁橋。築地川は埋め立てられ、そこが小さな公園や駐車場になっており、公園の出口のところにもこのような人工の池を作って、川らしく見せている、といった様子であったことを説明した。

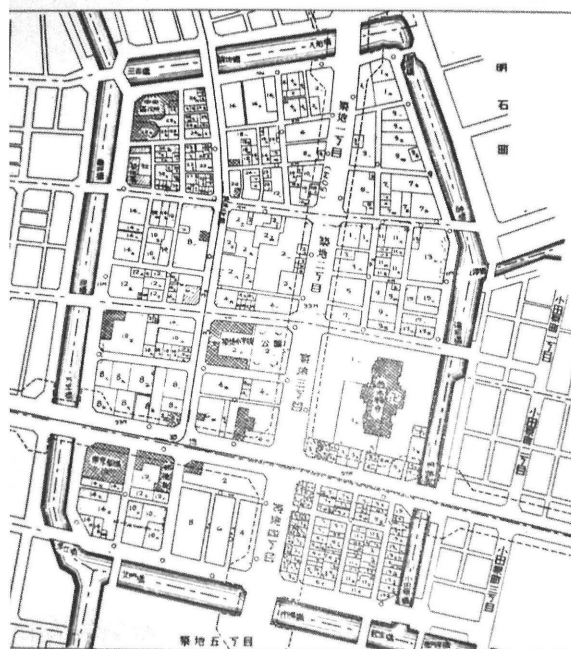
入船橋から暁橋へ行くまでの間、川向こうには平成17年の写真7のとおり「聖路加病院の壮大な建築がみえて」くる。昭和8年に完成した聖路加国際病院の建物は、壁に青、緑、黄のテラコッタをま



【写真7】 聖路加国際病院



【地図2】 京橋南築地鉄炮洲絵図（部分）
尾張屋清七 版 1861年（文久1）



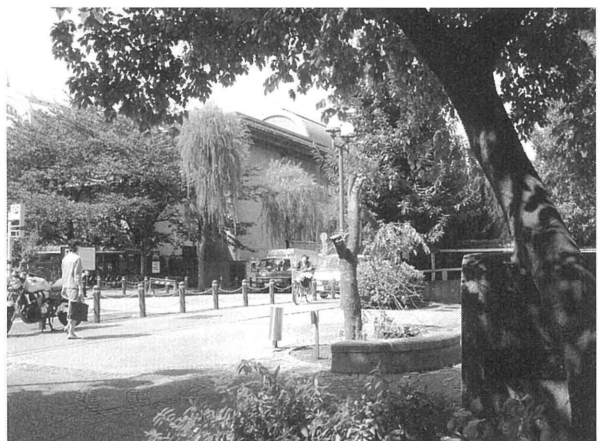
【地図3】 火災保険特殊地図 中央地区築地方面第二区（部分）
日本火保図株式会社 作成 昭和中期

た近代ゴシック様式の礼拝堂と一体となっていた¹¹⁾。平成6年に地上51階の聖路加タワーが建てられたため、現代では壮大な、という表現がしっくりこないかもしれないことを述べた。

残りは満佐子とみなだけである。第6の橋は堺橋。口絵17-㉗および地図1のとおり、築地川の東支川に架かる橋だ。大正3年の架橋で、この支川は、昭和46年に埋め立てられ、現在はあかつき公園となっている。なお堺橋の旧名は数馬橋。地図2の館蔵の江戸切絵図（京橋南築地鉄炮洲絵図 文久1年 資料番号86213135）にあるように堀数馬邸の前の橋である。この切絵図には備前橋の名も見える。築地は、明暦の大火（明暦3年 1657）後に海面を埋め立てて造成された土地で、築地川は、海面の一部が運河として埋め残された人工の川であることを解説した。なお、第6の橋、堺橋の親柱は現存するが、講座および展示準備の段階では場所を特定することが出来なかった。

地図3は、当館が所蔵する昭和20年代の火災保険会社専用の実測地図（火災保険特殊地図 中央地区築地方面第二区 資料番号87202147）で、町名、番地のほか、建造物の様子がよくわかるものだ。この地図にも「橋づくし」に登場する橋がいくつか描かれており、第7の橋、備前橋も地図3に位置することを示した。口絵17-㉘および地図1でも確認出来る。写真8が平成17年当時の備前橋。橋の手前はやはり公園で、橋を渡れば地下鉄築地駅となる。物語に、備前橋の「川向うの左側は築地本願寺」と記されている通り、築地本願寺の特徴ある屋根が写っている。関東大震災で崩壊した本堂は、昭和9年、伊東忠太（1867～1954）の設計による印度仏教式の様式にて落成した¹²⁾。昭和45年11月25日に自決した三島の葬儀は、翌年1月24日、この築地本願寺で執り行われた。葬儀委員長を川端康成（1899～1972）がつとめ、船橋聖一（1904～76）、武田泰淳（1912～76）らが弔辞を捧げている。一般の参列者は8,200人にのぼったといわれ、大変な規模の葬儀であったことを伝えた¹³⁾。

備前橋では、投身自殺に間違えられた満佐子が、警官に詰問され脱落し、7つの橋を渡り終えたのは、みなひとりとなる。満佐子は堺橋を渡ったところで背後から黙ってついてくるみなの存在が恐ろしくなってくるわけだが、ここで先に棚上げした、謎について考えてみた。みなの願いは何か、ということ、また、みなひとりが橋を渡りきるのはなぜか、そして、三島がありふれた橋を舞台にしたのはなぜか、という3点である。



【写真8】 第7の橋 備前橋

（3）作品のモチーフ

改めてみなのことを考えてみると、何か見当のつかない願い事を抱いた岩乗な女、というこの肉体的な特徴が、非常に象徴的である。三島は、昭和26年から27年にかけて北米、南米、欧州、そしてギリシアへの旅行に出掛け、そのギリシアで男性の肉体美に対する明晰な美を発見したとされている¹⁴⁾。そのことがきっかけとなってボディビルや剣道に励み、肉体改造に取り組むことになる。幼い頃に母親から引

き離され、厳格な祖母のもとで女の子の友人に囲まれて育てられたこと、子どもの時には身体が弱かったこと、男性としては決して長身ではないことなど、三島は頭脳明晰ではあったが、こと肉体に関しては大きなコンプレックスを終始抱いていた。¹⁵⁾ 肉体改造はその反動で、ボディビルをはじめた昭和30年には「力道山の体躯になりうるといふ宗教が出てくれば福音だと思う」とも言っている。¹⁶⁾ 「橋づくし」のみなは力道山であり、三島のコンプレックスの象徴なのではないか。それと同時に、何を考えているかわからない混沌とした存在、これは人工的に自らを演出し続けた三島とは対極に位置するもので、自然に根ざしたものの、あるいは民俗学を否定してきた三島ならではの態度から推察すると、みなは迫力というのは、三島が決して捉えることのできない自然の脅威と位置付けることが出来る。満佐子の恐怖は三島の恐怖であろう。土俗的な何かわからないもののみが、7つの橋を渡って勝利をおさめるのである。みなは願ひというのは、他の3人が橋を渡ればいい、あるいは美しくなりたいなどということも考えられるが、そのようなわかりやすいものではなく、何だかわからない、ということ自体が重要なことではなないだろうか。

物語の最後では、マニキュアをつけた満佐子の爪がみな丸い肩をつついて、みなは願ひを聞きただすところで終わるが、やはりみなは答えない。人工的なマニキュアをつけた爪は弾力のある重い肉にはじかれてしまうのだ。

「橋づくし」は、土俗的なものへの恐れと、土俗的なものが勝利するという皮肉な物語である。戦後の日本社会が、それまでとはうってかわって生きることの価値を見出したのとは対照的に、三島由紀夫は人間の死や滅びを題材とした作品を描き続けてきた。土俗は死につながるものでもあり、何よりも橋自体が、霊や生命が行き来する通い道といわれていること¹⁷⁾から、「橋づくし」は、そうした死のイメージを重要なモチーフとした作品と位置付けることが出来る。

写真9は、歌舞伎狂言の「心中天網島」、澤村宗十郎と岩井半四郎の演じる遊女・小春と紙屋治兵衛を描いた館蔵資料である（喜多川歌麿画 実競色の美名家見 紙屋次兵衛 紀ノ国屋小春 資料番号89204063）。「橋づくし」には、この近松門左衛門作の浄瑠璃「心中天網島」の一節である「名残の橋づくし」が、エピグラムとして掲げられているため、この資料も紹介した。

……………元はと問へば分別の
あのいたいけな貝殻に一杯もなき蜆橋、
短かき物はわれわれが此の世の住居秋の日よ。
—『天の網島』名ごりの橋づくし—

遊女・小春と紙屋治兵衛は追いつめられ、叶わない恋のために心中するわけだが、死出の道行きに曾根崎新地から網島の大



写真9 実競色の美名家見
紙屋次兵衛 紀ノ国屋小春
喜多川歌麿 画 寛政期

長寺まで橋を渡ってゆく。三島は築地川の橋にそれを重ねたことを次のように記している。¹⁸⁾

もともと近松の名残の橋づくしのパロディーを作るつもりで、築地近辺の多くの橋を踏査に行つた私だが、予想以上にそれらの橋が、没趣味、無味乾燥、醜悪でさへあるのにおどろいた。日本人はこれほど公共建造物に何らの趣を求めないのか、と今更ながら呆れ返つた。

ふたりの道行きを築地川に架かる「没趣味、無味乾燥、醜悪」な橋と重ねたところに、三島の「アイロニー」がある。「橋づくし」を読み進めてゆくと、ネオンが光り、ビルがそびえ立ち、ガソリンスタンドの灯りもまぶしく、工事用の資材やバラックが置かれたりと、あえて風情のない風景が描かれていることがよくわかる。没趣味、無味乾燥、醜悪な橋、これが三島が感じた昭和31年の7つの橋であった。現在はさらに見る影も無いが、三島が描いた時点でも風情はなかったのである。この皮肉を描くために、ありふれた川と橋を舞台に選んだのであった。永井荷風の作品を意識しているところにも、意気が野暮に侵されてゆく様子を描きたかったことがうかがえる。

なお、みなは自然に近い存在ではあるが、いわゆる野暮ではない。「橋づくし」は、自然が、土俗が勝利する皮肉を描いた作品であると同時に、野暮な文化への皮肉もうたった二重の皮肉が込められた物語といえよう。さらに、「橋づくし」発表の翌年にあたる昭和32年には、かねてより検討されていた自動車専用道路の建設をうながす「東京都市計画都市高速道路に関する基本方針」が建設省より出され、東京の運河を埋め立てて高速道路を走らせる計画が方向づけられた。¹⁹⁾ 風情のない風景がさらに味気ないものになってゆくこの時期に作品を発表したことも、皮肉のような気がしてならない。

もう一点挙げておきたいのは、「橋づくし」には数学的な秘密が隠されているということを三島が述べている点である。²⁰⁾

私にとっては、振付といふ芸術行為は、一種の謎めいた不可思議なものであるが、舞踊の作家といふものが、多数の碁石や駒を盤上に争はせる、いはば戦術家にも似た数学的頭脳の持主であるといふことは、半ば想像のついてゐたことながら、実際に接してみて、一驚を喫したのであつた。(中略) この台本は数学的特色を持つてゐる。と云つても初等数学に類するもので、四人の人物が七つの橋を完全に事なく渡りうるか、というふ数学的質問なのである。これが過般、柳橋のみどり会で、鯉三郎氏の振付によつて上演されたのを見て、私は、台本の初等数学に、見事な高等数学的解答が与へられたのを見たのであつた。

三島は4人が7つの橋を渡れるか、という数学的質問だ、と言っているが、それは「橋づくし」の物語の着想を、ケーニヒスベルク（現・ロシア領カリニングラード）の7つの橋にみようとする説に結びつくという。1736年、数学者のレオンハルト・オイラーは、7つの橋を一度ずつ渡る方法のないことを証明しており、三島はこの数学パズルの存在を下敷きにしていただけではないかとも言われている。²¹⁾ 7つの橋は渡ることができないという前提があるわけだ。つまり、みなを除く3人の望みというのは、作

品にも「筋が通っている 公明正大な望み」と書いてあるにも関わらず、そういう願いははじめから叶わない設定となっていることがわかる。なお、平成22年10月、大阪歴史博物館にて開催された「水都大阪と淀川」展を観覧した筆者は、展示されていた「なには八ツ橋智恵の渡」という江戸時代の木版に、かつての西横堀川一帯に架かる8つの橋を、一筆書きで渡るような問いかけが示されていることを知り得た。あるいはこうした資料の存在を、三島は知っていたのかもしれない。

講座の最後には、出版された種々の『橋づくし』の紹介を行ったが、詳細は展示編で掲げるものとする。

2. 展示編 ～三島由紀夫「橋づくし」を読む・歩く～

えどはくカルチャーの講座の最後には、常設展示室の展示解説をおこなった。また会期中の金曜日にはミュージアムトークも実施している。

「三島由紀夫「橋づくし」を読む・歩く」と題した展示は、東京ゾーン、近代都市生活、市民文化と娯楽コーナーのウォールケースを使用した。会期は平成17年10月12日(水)～翌年1月9日(月・祝日)。展示資料は表1のリストにあげた通りで、必要に応じて詳細なキャプションを付し、また展示期間をABCDEFの各期に分け、展示替えを実施した。時代の様相を表す資料は当館所蔵のもので組み立てたが、出版された『橋づくし』および三島由紀夫の関連資料については、資料所蔵者の協力により借用、展示した。

以下、講座編で紹介したものを除き、おもな展示資料を解説する。

昭和33年に文藝春秋新社から単行本として出版された『橋づくし』は、ほか6つの短編を収録している(リスト番号3)。函は意気な紺色の縞模様で(口絵20)、第5版となるとデザインはそのままピンク色の仕立て(口絵21)(リスト番号4)としている。

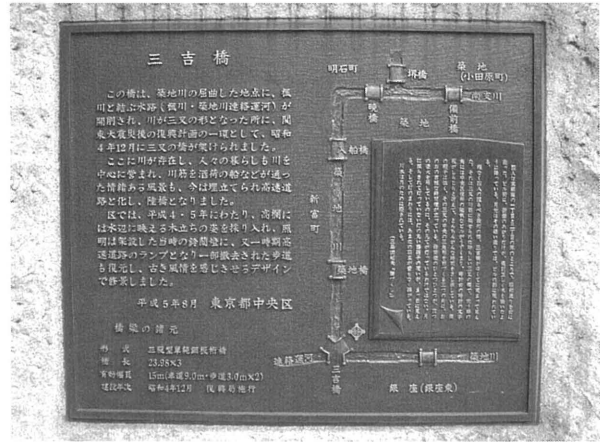
このほかにも限定120部の雪月花と呼ばれる特装本(口絵22)(リスト番号50～52)、限定23部の鮫小紋本(口絵23)(リスト番号2)があり、どちらも瀟洒な美しい造りとなっている。特装本は、三島の母・倭文重の着物を仕立てる予定であった反物からつくられ、随所にその意見が取り入れられた²²⁾。鮫小紋とは肩衣、袴に多く用いられた小紋型の一種。細かい点を一面に白抜きに染め出した文様で、鮫の皮に似ているところからその名がある²³⁾。

リスト番号7、8は、登場人物の着ている浴衣の地がわかるもの、リスト番号9の招き猫を展示したのは、昭和33年に明治座で上演された「橋づくし」舞踏劇用の脚本で、三島がお金が欲しいという願いごとのある小弓に、招き猫を持たせていることに困んだものである。また、満佐子が心惹かれている「R」のモデルとなった市川雷蔵に関する資料(リスト番号11)、「女中」みなの置かれた環境が推察できるような資料(リスト番号12、13)も紹介した。

作品の舞台となった7つの橋については、三吉橋の側に立つ碑(写真10～11)(リスト番号14)と、平成17年当時の風景を写真パネルで展示(口絵19、写真3～4、6、8)(リスト番号15～19)、昭和31年当時の橋の様子がわかるものは資料で展示する方法を模索した。築地橋については、都電の路線がわかるもの(リスト番号23)が用意できたが、入船橋についてふさわしい展示資料を探すことが難し



【写真10】「橋づくし」の碑



【写真11】「橋づくし」の碑（レリーフ部分）

く、作品に描かれた情景と同じような、満月のもとでの釣りや、輸送に使われた高瀬舟が浮かぶ水辺の風景を展示した（リスト番号24）。場所は月島、築地に近い地域であるが、たいへん苦しい展示となった。リスト番号25は、講義編でも紹介した、創作版画家の武藤六郎が昭和7年に描いた暁橋の様子である。親柱は昭和31年当時も変わらないものであった。なお、堺橋の親柱は現存するが、展示準備の段階では場所を特定出来ず、展示パネル化が叶わなかった。

リスト番号29は、落成当時の築地本願寺を写した館蔵の絵葉書である。また、リスト番号33は、「橋づくし」の特装本である鮫小紋本の帙に貼られた、作品の舞台となった場所の地図だ。7つの橋があることをデザイン化されたこの地図でも確認した。

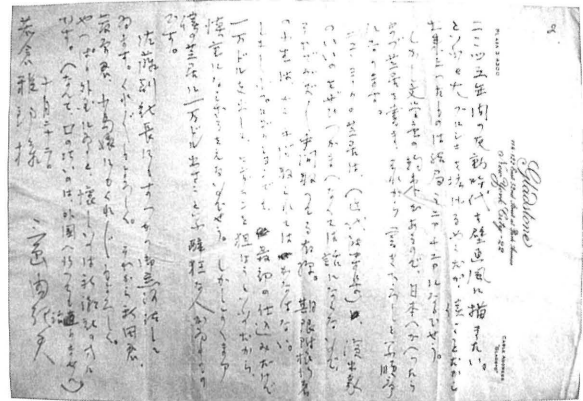
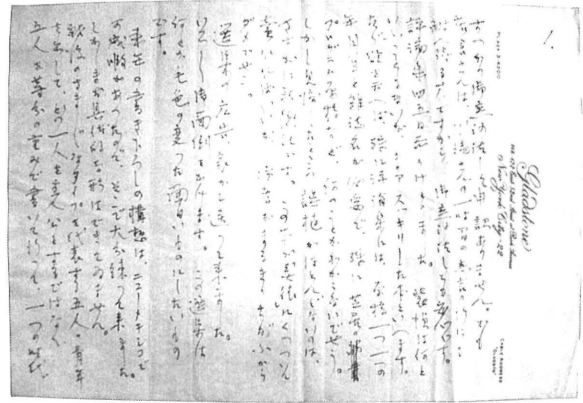
築地周辺には多くの劇場があるが、文学散歩の集合場所とした歌舞伎座が、桃山様式をまとったコンクリート造の形になったのは大正14年。その後、昭和20年5月の空襲で被災し、26年1月に復興再開場を果たした²⁵⁾。歌舞伎の台本も手がけた三島は、昭和30年、ここで自作の「芙蓉露大内実記」を演出している。三島は、名女形である六世中村歌右衛門に魅せられ、昭和28年の「地獄変」以来、多くの台本を歌右衛門のために執筆している。こうした経験を通して生まれた作品に、昭和32年発表の「女方」がある。女形の魅力に取りつかれた作家が、想いに幻滅するまでを描いた作品だ。リスト番号39は、その自筆原稿で、三島と歌舞伎狂言の関わりを伝える資料として展示した。

聖路加病院のスケッチ画（リスト番号26）のほか、登場する建造物についても紹介した。物語で満佐子は、「同じ道を二度歩いちゃいけない」ことから、「東京劇場」と「新橋演舞場」の前を歩いて、家に帰ろうと考える。昭和5年に建設、第二次世界大戦下の空襲で焼け残った東京劇場でも、多くの歌舞伎が上演された。リスト番号36は、銀座の風景を数多く撮影した師岡宏次（1914～1991）の作品で、遠景に東京劇場が写っていたものだ。

橋に関わる伝説が、物語の深層に織り込まれていることから、当館で所蔵する2点の資料を展示した²⁶⁾。リスト番号43は新潮社の編集者・進藤純孝（本名・若倉雅郎）に宛てた書簡（写真12）。昭和33年から発表された「鏡子の家」の構想について記している。「鏡子の家」は、頹廢した世相を背景に「戦後のさまざまなタイプを代表する」若者たちの生の軌跡を描く。三島はこの作品でも橋を象徴的に使用し、可動橋である勝鬨橋に車の行く手を阻まれる冒頭のシーンは、登場人物たちの未来を暗示している。

また、リスト番号42は、昭和29年から翌年にかけて発表された川端康成の「東京の人」に関する文章。この作品では、「橋づくし」に登場する7つの橋のまじないのエピソードが登場する。三島は川端の推薦によって戦後文壇に登場した。終生親交の厚かったふたりが同じテーマを取り上げたという興味深い事例である。

展示の終わりに示したのは、講義編でも紹介した、特装本の、雪の巻、月の巻、花の巻、雪月花である。夫婦函に三島家の家紋入り袱紗、築地絵図をあしらった帙、と、鮫小紋本と仕立てが類似している。鮫小紋本も特装本も、三島の自筆署名入りである。本文の特漉き和紙の間には、月に照らされた橋の絵が挿入され、本文の後ろから透けて見える造りとなっており、リスト番号52、53は、その挿絵の原本となったものである。



【写真12】 進藤純孝（若倉雅郎）宛書簡
1957年（昭和32）10月22日付

3. 文学散歩編

(1) 橋と遺構を巡る

文学散歩は、平成17年11月9日（水）、14時から16時まで実施した。都心のような交通量の多い場所での散歩講座は、受講者の安全性を確保するため、受け入れることの出来る人数が限られたものとなる。

文学散歩の面白さは、物語を、舞台となった場所で読み込む点につきると筆者は考えている。この散歩講座でも、配付したレジュメに作品の一部を掲げ、受講者と一緒に場所場所で読み上げた。本項では、随時その部分を紹介してゆく。当時は、レジュメで示した案内図に沿ってルートをたどった。また、集合場所の歌舞伎座をはじめ、銀座界隈の劇場は、三島由紀夫とも「橋づくし」とも関連のあるものが多い。解説は、こうした建造物や橋の遺構のうち、作品と関わりのある場所だけではなく、地域の歴史的・文化的背景を知ることの出来るものについても行った。作品を取り巻く時代の様相を知ってもらうきっかけとなるからである。

以下、散歩講座の内容を順を追って記す。講座編、展示編と内容が重なる部分もあるが、事前講義での受講内容を、散歩講座で反芻するということも、作品理解に大いに役立つものといえることから、あえて掲載するものとした。

平成17年11月の歌舞伎座は顔見世興行中で、櫓が組まれていた。三島は、昭和17年1月から22年11月までの戦中戦後の混乱期にも歌舞伎の舞台を観覧している。詳細な観劇日記を記すほどの歌舞伎ファン

であった。歌舞伎座の創建は明治22年11月、劇作家の福地桜痴（1841～1906）が欧米視察の結果、演劇文化の昂揚を唱えて出資を取り付け、江戸時代から芝居に縁の深かった木挽町を敷地に選んだ。洋風木造建て、定員1,824名という大建築で、座付き役者に九代目団十郎、五代目菊五郎、初代左団次などが名を連らね、規模、内容ともに日本を代表する劇場となった。しかし経営者が定まらないなど、外観の壮麗さに比べて内情は必ずしも安定していたわけではない。ここに登場するのが、大谷竹次郎、白井松次郎の兄弟である。関西方面の劇場経営に力を発揮していたふたりは、兄弟の名を取って松竹合資会社を設立。これが今日の松竹株式会社の前身で、大正2年に歌舞伎座を傘下に収めた。その後、歌舞伎座は破風造の宮殿様式、純和風の建物に改築される。ところが大正10年に漏電による焼失があり、大正12年5月に上棟式を行うも、9月の関東大震災で鉄骨が曲がり、無残な姿となった。再建を反対する声も多かったが、竹次郎、松次郎の兄弟はこれを断行、約1年間で桃山様式をまとった鉄筋コンクリート造の建物が完成し、4階建て、定員2,474人という規模で運営を開始した。この建物も昭和20年5月の空襲で被災、復興したのは昭和26年で、地階とも6階建ての建物、2,600人を収容できる規模となった。²⁷⁾歌舞伎狂言は戦後しばらくの間、歌舞伎座で上演できず東京劇場で行われており、三島もその間、通っていた。

三島はみずからの作品をこの歌舞伎座で何度か上演している。昭和28年12月に、芥川龍之介原作の「地獄変」を脚色、これは中村吉右衛門劇団によって演じられ評判となった。また、昭和30年11月には中村歌右衛門のために「芙蓉露大内実記」を演出した。このように歌舞伎と縁の浅くない三島は、劇作家としても高い評価を得ている。よく知られているのは能の持つ主題を現代的な状況の中に再現したとされる「近代能楽集」（昭和25～35年）だ。古典文学の持つ普遍的なテーマを戯曲化したということで、海外でも上演され、好評を得た。今日の日本でも繰り返し演じられているのは、これらの作品が、時代を超えて理解されるテーマを持っていることの現れであろう。

場所や時代を超える普遍性を持っているという点では、SFの要素を取り込みながら人間社会への鋭い洞察を織り込んだ「美しい星」（昭和37年）という作品もある。そして遺作となった「豊穡の海」（昭和40年～45年）は輪廻転生を扱った物語で、平成17年に第一部の「春の雪」が映画化された。このフィルムに出演した岸田今日子（1930～2006）は、三島とは学生時代からの遊び仲間で、文学座では役者と文芸部員という間柄であった。岸田は多くの三島の劇作品に出演しており、三島の戯曲について次のように語っている。²⁸⁾せりふが「あまりにもきっちり書かれているので、想像力をふくらませる余地がないって人もい」る。「スキをどう埋めていくかっていう戯曲もあるんですけど、三島さんの場合、埋めるところがあんまりない」。演じる「役者には任せられないみたいな、全部戯曲の中で完結しちゃう」ものだったというのだ。それと同時に「人工的なんだけど、俳優にとってはそれを語るのが非常に心地よって感じ」と述べ、三島作品が、確かな構成力と、無駄のない言葉の力によって支えられたものであるということを語っている。また、「言葉の組み立て方が、比喩や逆説の花束みたい」とも言っており、ここに歌舞伎のせりふからの影響を見てとることが出来る。

このように言葉の組み合わせや配置を緻密に計算した世界は、戯曲に限ったことではなく三島作品の多くに現れており、「橋づくし」もまた、築地川を舞台に、その物語の構成を綿密に計算したひとつの

作品であることがいえよう。

ここからは、登場人物の動きと散歩のルートをたどってみたい。小弓とかな子が新橋の料亭・米井に向かう様子は次のように描かれている。

すでに寝静まった銀座を、小弓とかな子が浴衣がけで新橋の米井へ歩いてゆくとき、かな子は窓々よろいどに鎧扉を下ろした銀行のはずれの空を指して、「晴れてよかったわね。本当に兎のいそうな月よ」と言ったが、小弓は自分の腹工合のことばかり考えていた。

レジュメで示した案内図にも、口絵17にも、ほぼ同じ所に銀行がある。このあたりの道を月の出ている東に向かってふたりは歩いていったことになる。物語の重要な演出上の装置である月が、この時点ではまだ輝いていることがわかる。料亭・米井のある場所は新橋演舞場のすぐ近くと考えられ、一帯には現在でも料亭が立ち並んでいる。

このあと新橋演舞場の解説を行なった。演舞場は、新橋芸者の「東をどり」を披露する場所として大正14年に開場、昭和15年から松竹が興行を請け負っている。昭和20年5月の空襲で外壁を残して焼失し、23年に復興したが、現在は、昭和57年に建てられた日産自動車の建物と一体化し、新派はもちろんのこと、松竹新喜劇の上演でも知られている。演舞場の北側にあるのが東劇ビル、現在は映画館だが、昭和5年に新築劇場として開場、先ほども記したとおり、昭和20年から歌舞伎も上演されていた。空襲で焼けなかったが、昭和47年に閉鎖、現在の東劇ビルは昭和50年の建設である。満佐子は作品の終わりの方で、同じ道に戻らないために、この東劇と新橋演舞場の前を通って米井まで帰ろうとする。以上の解説をした場所は、やはり築地川を埋め立てて作った築地川銀座公園で、側に昭和3年に完成した万年橋がある。次に向かう第1、第2の橋・三吉橋はこの万年橋に平行して架かっていることになる。

ここでもうひとつ、芝居の話をつけ加えた。作品のエピグラムに掲げられている「心中天網島」は、もともと享保5年(1720)に曾根崎新地の遊女・小春と紙屋の治兵衛が実際に起こした心中事件をもとに近松門左衛門が書き上げた作品である。「心中天網島」のタイトルは、実際の心中が大坂網島の大長寺であったということに、天網29)をかけている。天網とは、天が張り巡らす網のこと、悪事に対して天道の厳正なことを例えた語30)で、「天網恢恢疎にして漏らさず」ということわざもあることから、天罰という意味がふくまれている。これは家族の義理を捨てて一緒になろうとしたふたりの天罰、ということであろうが、「橋づくし」には、天の采配によるみな勝利、という意味がこめられているのかもしれない。

小弓、かな子、満佐子、みな4人が料亭・米井でそろい、浴衣を着て夜の街を出発する。作品の通りに進むならば、演舞場近くの米井から昭和通りに出て、北の方に歩いて銀座東の1丁目と2丁目の間を東へ曲がることになる。散歩では、来た道に戻るようになるが、昭和通りに出て、現在の銀座1丁目と2丁目の間を曲がり、第1、第2の橋、三吉橋まで進むことにした。

三吉橋の側には、中央区の建てた碑があり、築地川の説明と、「橋づくし」の一節を載せている(写真10～11)。碑を見ると、T字型の川に対してY字型に橋が架かっているのがよくわかる。橋は、地下鉄新富町駅の真上にあたり、左に渡ると新富方面、右に渡ると築地方面となっている。4人は右側の中

中央区役所の方向に向かう。

程なく四人の渡るべき最初の橋、三吉橋がゆくてに高まって見えた。それは三叉の川筋に架せられた珍しい三叉の橋で、向う岸の角には中央区役所の陰気なビルがうずくまり、時計台の時計の文字板がしらじらと冴えて、とんちんかんな時刻をさし示している。橋の欄干は低く、その三叉の中央の三角形を形づくる三つの角に、おのおの古雅な鈴蘭燈が立っている。鈴蘭燈のひとつひとつが、四つの燈火を吊しているのに、その凡てが灯っているわけではない。月に照らされて灯っていない灯の丸い磨硝子の覆い^{すり}が、まっ白に見える。そして灯のまわりには、あまたの羽虫が音もなく群がっている。

橋の上には現在も鈴蘭燈が立っているが、作品に描かれた「古雅な鈴蘭燈」ではないようである（口絵19参照）。ここで受講者とともに、4人と同じように橋の二辺を渡った。

女たちはそろそろと橋を渡りだした。下駄を鳴らして歩く同じ舗道のつづきであるのに、いざ第一の橋を渡るとなると、足取は俄かに重々しく、檜の置舞台の上を歩くような心地になる。三叉の橋の中央へ来るまではわずかな間である。わずかな間であるのに、そこまで歩いただけで、何か大事を仕遂げたような、ほっとした気持になった。

小弓は鈴蘭燈の下で、ふりむいて、又手をあわせ、三人がこれに習った。

小弓の計算では、三叉の二辺を渡ること、橋を二つ渡ったことになるが、渡るあとさきに祈念を凝らすので、三吉橋で四度手をあわさねばならない。

かな子や満佐子は橋を2つ渡っただけで願い事の強さがより増してくる。小弓もまた、次の第3の橋、築地橋を渡りながら、7つの橋を無事に渡ること自体が自分の願い事のような気がしてくる。のちの三島自身の姿にみられるように行動が思想を支配してゆく様子が描かれている。

次の築地橋のところで、柳についての記述がある。

第三の橋は築地橋である。ここに来て気づいたのだが、都心の殺風景なこういう橋にも、袂には忠実に柳が植えてある。ふだん車で通っては気のつかないこうした孤独な柳が、コンクリートのあいだのわずかな地面から生い立って、忠実に川風をうけてその葉を揺らしている。深夜になると、まわりの騒がしい建物が死んで、柳だけが生きていた。

しかし平成17年当時の築地橋のまわりには柳はない。「橋づくし」ではわざわざ「築地橋は風情のない橋」と記されているが、現代ではさらに風雅のない橋となっている。築地橋では、かな子が腹痛のため脱落する。橋を渡ったところで見えたのが、菊正宗酒造株式会社東京支社のビルである（写真3参照）。昭和2年10月に竣工した建物で、もともとは松竹の本社ビルであった。松竹は関東大震災後の大正13年に、采女町にバラックを建てて仕事をしていた。やがて昭和2年にこの建物が竣工すると、昭和31年³¹⁾に松竹会館に業務を移すまで、この地を本拠地としたのである。なお、この建物の隣に、震災後、やはり

松竹の傘下に入った劇場・新富座があった。現在は京橋税務署となり、側に案内板が立っている。新富座は、もともと猿若町にあった守田座を十二世の守田勘弥が劇場の中央進出をねらって明治5年にこの地に移転。間口や奥行を広くして、天井を板張りにするなどの工夫をしたという。新富座と名前が変わったのが明治8年、翌年類焼を受けるも、明治11年に新築開場した際は照明にガス灯を用いた。しかし歌舞伎座が誕生すると、その勢いに押され衰退の道をたどる。³²⁾

第4の橋、入船橋は、交通量が多いため立ち止まることが出来ず、解説をする前に渡った。この道は隅田川に架かる新大橋に続く新大橋通で、地下には地下鉄日比谷線が走っている。

入船橋の名は、橋詰の低い石柱の、緑か黒か夜目にわからぬ横長の鉄板に白字で読まれた。橋が明るく浮き上って見えるのは、向う岸のカルテックスのガソリン・スタンドが、抑揚のない明るい燈火を、ひろいコンクリートいっばいにぶちまけている反映のためであるらしい。

川の中には、橋の影の及ぶところに小さな灯も見える。栈橋の上に古い錯雑した小屋を建て、植木鉢を置き、

屋形船
なわ船
つり船
あみ船

という看板を掲げて住む人が、まだ起きている燈火であるらしい。

ここあたりから、ビルのひしめきは徐々に低くなって、夜空がひろがるのが感じられる。気がつく
と、あれほどあきらかだった月が雲に隠れて、半透明になっている。総体に雲の嵩が増している。

昭和31年に同じ位置にあったかということを確認められなかったが、道を渡る際にガソリンスタンドを確認することが出来た。当時はまぶしいネオンの光とは対照的な、抒情的な風景も見られたことが記されている。川が埋め立てられている様子、特にこの場所では川がほぼ直角に曲がっていることを確認した。もともと築地川は、明暦の大火後に埋め立てた土地のまわりを人工的に残した運河で、この地がちょうど角の部分にあたるのがよくわかった。よって次の第5の橋、暁橋に行くには、公園をまっすぐ進むことになる。

川は入船橋の先でほとんど直角に右折している。第五の橋までは大分道のりがある。広いがらんとした川ぞいの道を、暁橋まで歩かなければならない。

右側は多く料亭である。左側は川端に、何か工事用の石だの、砂利だの、砂だのが、そこかしこに積んであって、その暗い堆積が、ところによっては道の半ばまでも侵している。やがて左方に、川むこうの聖路加病院の壮大な建築が見えてくる。

それは半透明の月かげに照らされて、鬱然と見えた。頂きの巨きな金の十字架があかあかと照らし出され、これに侍するように、航空標識の赤い燈が、点々と屋上と空とを劃して明滅しているの

る。病院の背後の会堂は灯を消しているが、ゴシック風の薔薇窓の輪郭が、高く明瞭に見える。病院の窓々は、あちこちにまだ暗い燈火をかかげている。

歩いてゆくと、確かに昭和8年に建った聖路加国際病院の建物、近代ゴシック様式の礼拝堂が見えてきた。歌舞伎座の被災に対して、築地付近は空襲による被害が少なかった。

同院は、もともとは明治33年に来日したルドルフ・ボリング・トイスラーにより設立された病院で、塔屋を含む礼拝堂以外は平成4年に改築され、平成9年には病院の建物も高くなっている。さらに平成6年には地上51階建ての聖路加タワーが建ち、平成に入ってから景観は、ずいぶん変わったものとなった。この地点を歩いている時、受講者から建物の上に月が見えるという指摘があった。昼間にもかかわらず中空に月が懸かっているのが確認できた。偶然の出来事ではあったが、町の中で作品を読むことの醍醐味を感じ、また、受講者とのコミュニケーションもはかれた。

やがて暁橋に到着した。

第五の暁橋の、毒々しいほど白い柱がゆくてに見えた。奇抜な形にコンクリートで築いた柱に、白い塗料が塗ってあるのである。その袂で手を合わせるときに、満佐子は橋の上だけ裸かになって渡してある鉄管の、道から露わに抜き出た個所につまづいて危うくころびそうになった。橋を渡れば、聖路加病院の車廻しの前である。

現在の暁橋は、橋とはいえない形になっている。文学散歩の下見に訪れた際は夏の盛りであったため、噴水のようになっていたが、散歩当日は秋も深まり、水もたたえていなかった。橋自体のプレートは古い物のように見受けられるが、親柱は、昭和31年当時のものではない。公園が整備された1990年代まではこの柱も健在であったようである。³³⁾ 物語では入船橋のあたりから月が雲に隠れ、暁橋の近くで雨が降り出す。願いを見守っていた月が、見えなくなってゆくという不吉な予言だ。小弓はここで、知り合いの老妓から声をかけられ脱落。残ったのは満佐子とみなであった。散歩では、橋とはいえない形になっている暁橋の反対側まで進んだ。

暁橋は、明石町と築地を結ぶ橋である。³⁴⁾ ここで明石町の歴史を次のように解説した。明治元年(1868)から居留地となった明石町は、明治32年に内地雑居が可能となると外国人に加えて日本人の資産家もここに屋敷を建て、関東大震災の被害に遭うまでは、洋風の建物が立ち並ぶ町並みだった。明治8年には、麻布の善福寺におかれていたアメリカ公使館がこの地に移っている。周辺にはこのほかにも、現在の立教学院や女子学院などのキリスト教系学校発祥の地の碑など、文明開化の息吹を伝える史跡がいくつかある。また、芥川龍之介(1892～1927)の生誕地であるという案内も設置されている。芥川は明治25年、渋沢栄一(1840～1931)の経営する牛乳販売業耕牧舎の新原敏三、フクの長男としてこの地に生まれた。さらには赤穂事件で知られた浅野長矩(1667～1701)の上屋敷のあった場所、福沢諭吉(1834～1901)の家塾の碑、解体新書の碑などの紹介を行い、聖路加国際病院の構内には中津藩の中屋敷があったことも伝え、³⁵⁾ 受講者に、機会があればぜひまた訪れてもらうよう、促した。

次の第6の橋、堺橋は、築地川の支流に架かる橋なので暁橋とは直角に位置する。ここで受講者と一緒に親柱を確認することが出来た。あかつき公園のアスレチック広場が支流の跡となっており、この支流は昭和46年に埋め立てられた。

第六の橋はすぐ前にある。緑に塗った鉄板を張っただけの小さな堺橋である。満佐子は橋詰でする礼式もそこそこに、ほとんど駈けるようにして、堺橋を渡ってほっとした。そして気がつくともう小弓の姿は見え、自分のすぐうしろにみなのもつりした顔が付き従っていた。

ここでまばらな雨滴が満佐子の頬を打つ。やがて満佐子はみなが存在がだんだん怖くなって来る。

かな子が落伍した頃まで、みな^ゝの存在は、満佐子の心にほとんど軽侮に似たものを呼び起すだけだったが、それから何かしら気がかりになって、二人きりになった今では、この山出しの少女が一体どんな願い事を心に蔵しているのか、気にしまいと思っても気にせずにはいられない。何か見当のつかない願事^{ねぎごと}を抱いた岩乗^{がんじょう}な女が、自分のうしろに迫って来るのは、満佐子には気持が悪い。気持が悪いというよりも、その不安はだんだん強くなって、恐怖に近くなるまで高じた。

小弓、かな子、満佐子の3人は自分の願いを口に出しては言わなかったが、何を望んでいるのかはお互いに明白であった。作品には「透明な願望」と記されている。ところがみな^ゝの願いは何だかわからない、この、何だかわからないものへの恐怖、これが講座編でも触れた、人工的に自分自身を演出し、またそうした作風を得意とした三島由紀夫自身の、土俗的なものに対する恐怖であることを改めて確認した。最後の第7の橋まで進むが、そこも風情はない。

三味線の箱みたいな形のコンクリートの柱に、備前橋と誌^{しる}され、その柱の頂きに乏しい灯がついている。見ると、川向うの左側は築地本願寺で、青い円屋根が夜空に聳えている。同じ道を戻らぬためには、この最後の橋を渡ってから、築地へ出て、東劇から演舞場の前を通過して、家へかえればよいのである。

入水自殺と間違われて警官に呼ばれた満佐子は、ここで脱落する。

「返事をしろ。返事を」

警官の言葉は荒くなった。

ともあれ橋を大いそぎで渡ってから釈明しようと決めた満佐子は、その手をふり払って、いきなり駈け出した。緑いろの欄干に守られた備前橋は欄干も柵物線^{ほうぶつせん}をなして、軽い勾配の太鼓橋になっている。駈け出したとき満佐子の気づいたのは、みな^ゝも同時に橋の上へ駈け出したことである。

橋の形が「軽い勾配の太鼓橋」になっているのがかろうじてわかったが、渡った先は駐車場になっていた。

(2) 縁の地・築地

ここで作品のおさらいを行うことにした。7つの橋をすべて渡り終えたのはみなひとり。三島は土俗的なものへの恐怖と自らの肉体に対してコンプレックスを抱いており、「橋づくし」発表の前年にあたる昭和30年からボディビルを開始し、肉体改造に取り組んでいた。岩乗な女、というみな肉体的な特徴は、三島のコンプレックスの象徴と考えられる。よって満佐子の恐怖は三島の恐怖であること、みなの願いは読者にも明かされず、何だかわからないからこそ、橋を渡りきることが出来たという話である。

橋の向こうに築地本願寺の屋根が見えていたので、そこまで進むことにした。

築地本願寺は大正12年の関東大震災で崩壊、現在の本堂は、昭和10年に伊東忠太の設計で落成した印度仏教式の鉄筋コンクリート造の建物である。京都の浄土真宗本願寺派の別院で、江戸前期に浜町に創建。明暦の大火で類焼し、この地に移転した。しばしば火災や暴風雨に遭い、明治以降も数度に渡って建て替えられている³⁶⁾。

昭和45年11月25日に自決した三島の葬儀は、翌年の1月24日、ここで執り行われ、8,200人の一般参列者があったという。不思議な縁のある場所で、文学散歩は解散とした。

おわりに

筆者はこれまでに、江戸東京博物館や館外の教育機関における講座で、東京のさまざまな地域の文学散歩を行ってきた。なかでも平成12年3月16日に当館で実施した「浅草 文学ゆかりの地を歩く」は、4人の学芸員が、江戸から近代の浅草の歴史と文化を振り返りつつ、萩原朔太郎(1886～1942)の詩や、川端康成の小説を、受講者とともに舞台となった場所で読むという講座で、筆者にとっては文学散歩の効用について大きく考えさせられる経験であった。それまでは、文学作品とは、作家の生き様の表出はあるにせよ、作品に何が描かれたのか、主題はどういったことか、文体の技巧に芸術性があるか、という視点から読み解くものと捉えていた。しかし、昭和5年に発表された川端康成の「浅草紅団」³⁸⁾の一節を隅田川べりで朗読した時、時代を超えて、文化的、歴史的背景を持った周囲の風景、つまりその土地の持つ力が、言葉の魅力をいっそう引き出すことに気がついたのである。この傾向は、その後の散歩講座でも、川や木、崖といった都会の中にある自然を前にした時や、過去の地勢を想像することが出来る坂を歩く時などに、顕著に感じられた。このほかにも「浅草紅団」については、平成12年当時³⁹⁾には立っていた、作品に登場するビルを前に朗読を行ったが、あたかもそこに登場人物が現れたかのように感じたことを記憶している。このような歴史を語る遺構もまた、文学作品を堪能する上で不可欠な要素といえるのである。

こうした経験をふまえて試みた「橋づくし」の文学散歩は、埋め立てられてはしたものの、川の流れと橋の遺構をたどることが出来る点、また、劇場をはじめとする建造物や三島と芝居と関わりから、そ

の文化的、歴史的側面に触れられる点が、作品理解に有効に作用したと思われる。加えて、文学散歩は事前の講義の実施を前提に開催するべきであることを改めて認識した。本「紀要」にも文学散歩の意義について、その実績をもとに興味深い考察を寄せている行吉正一学芸員が常々述べているように、座学形式の講座で学んだ内容を、後日の散歩講座で反芻することが、作品のさらなる理解を深めるのである。受講者の多くからこうした講座、文学散歩のあり方に対して高い評価をいただいた。また、今回は「橋づくし」をテーマとした特集展示を行い、博物館活動の中軸を成す資料を通しての作品理解の場を設けた。このような「講座・展示・文学散歩」という異なった手法を組み合わせた方法こそ、博物館ならではの教育普及活動ではないかと思われる。これからも、こうした試みを通して歴史や文化に触れる機会を数多く作っていきたい。

最後になったが、本講座、文学散歩および特集展示を開催するにあたり、神奈川近代文学館の半田典子氏、資料所蔵者のみなさまには、多大なるご協力とご教示を賜った。本稿でも写真の掲載等に快く承諾をいただいている。改めて謝意を表したい。

【註】

- 1) 奥野健男『三島由紀夫伝説』（新潮文庫 2000年）で、公私ともに三島に親しんだ奥野は、「なぜあんなぶざまな最期を遂げなくてはならなかったのか、腹立たしく、また可哀相な思いがつのるばかりであった。（略）三島由紀夫のそれまで書いてきた文学作品や芸術理論の大きさ深さに対し、彼の檄文や演説は余りに小さく浅かった。」と記している。
- 2) 三島由紀夫「『橋づくし』について」（『歌舞伎座公園筋書』 1961年）なお、この時の「橋づくし」の脚色・演出は、榎本滋民による。
- 3) 前田愛「三島由紀夫「橋づくし」（『文学の街 名作の舞台を歩く』小学館ライブラリー 1991年）によれば、市川雷蔵だという。端正な二枚目として知られた雷蔵は、のちの昭和33年、三島の「金閣寺」を原作とする市川崑監督の「炎上」に主演し、その実力を見せつけた。
- 4) 田中美代子「解題」（『決定版 三島由紀夫全集 19』新潮社 2002年）
- 5) 前出、前田愛「三島由紀夫「橋づくし」（『文学の街 名作の舞台を歩く』）
- 6) 三島由紀夫「あとがき（『橋づくし』）」（『橋づくし』文藝春秋社 1958年）
- 7) 『中央区史 下巻』（1958年）
- 8) 『中央区三十年史 上巻』（1980年）
- 9) 林順信『東京・市電と街並み』（小学館 1983年）
- 10) 『日本伝奇伝説大事典』（角川書店 1986年）
- 11) 聖路加国際病院の建築については、宍戸實「聖路加国際病院と聖ルカ礼拝堂 その意匠と象徴」（『病院建築のルネッサンス—聖路加国際病院のこころみ』INAX出版 1992年）に詳しい。
- 12) 鈴木博之・初田亨編『図面で見える 都市建築の昭和』（柏書房 1998年）
- 13) 『新文芸読本 三島由紀夫』（河出書房新社 1990年）
- 14) 前出、奥野健男『三島由紀夫伝説』
- 15) 前出、奥野健男『三島由紀夫伝説』
- 16) 「アサヒグラフ」（1955年11月）
- 17) 『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館 2000年）
- 18) 前出、三島由紀夫「『橋づくし』について」（『歌舞伎座公演筋書』）
- 19) 『首都高速道路公団三十年史』（1989年）
- 20) 三島由紀夫「『橋づくし』について」（『西川会プログラム』1959年）
- 21) 前出、前田愛「三島由紀夫「橋づくし」（『文学の街 名作の舞台を歩く』）

- 22) 川島勝『三島由紀夫』(講談社 1996年)
- 23) 岡登貞治『文様の事典』(東京堂出版 1989年)
- 24) 第11回柳橋みどり会公演(1958年10月26日～31日)。なお、翌年には名古屋の第5回西川会において再演されている。
- 25) 『松竹百年史』(2006年)
- 26) 平成14年に閉館した旧東京都近代文学博物館所蔵資料。同年に当館に移管された。
- 27) 歌舞伎座の歴史については、前出、『松竹百年史』による。
- 28) 岸田今日子「三島さんの思い出」(「ユリイカ」1986年5月号)
- 29) 戸板康二「心中天網島」(『名作歌舞伎全集 第1巻 近松門左衛門集一』東京創元社 1969年)
- 30) 『日本国語大辞典』(小学館 1975年)
- 31) 前出、『松竹百年史』
- 32) 前出、『中央区史 下巻』
- 33) 前出、前田愛「三島由紀夫「橋づくし」」(『文学の街 名作の舞台を歩く』)
- 34) 『角川 日本地名大辞典13 東京都』(1978年)によれば、「橋名の「暁」は明石町の「あかし」にちなむものであろう」とある。
- 35) 明石町の歴史については、清水正雄『東京築地居留地百話』(冬青社 2007年)に詳しい。
- 36) 前出、『中央区史 下巻』
- 37) 湯川のほか、山崎尚之、行吉正一、田中実穂
- 38) 浅草を舞台に不良少年少女が活躍する物語。
- 39) 1929年(昭和4)開業の浅草雷門ビル。屋根に塔を配したモダンな建物として知られたが、近年取り壊され、現在は新しいビルが立っている。

※本論の「橋づくし」の引用は『橋づくし』(新潮文庫)による。

【表1】 三島由紀夫「橋づくし」を読む・歩く 展示資料リスト

No.	資料名	時代年代	作者等	展示期間	二分類	資料番号・所蔵先
1	三島由紀夫肖像	1860年(昭和35)		A	写真パネル	個人蔵
2	『橋づくし』 鮫小紋本	1971年(昭和46)	牧羊社 発行	B	和装本	個人蔵
3	『橋づくし』	1958年(昭和33)	三島由紀夫 著 文藝春秋新社 発行	D	図書	個人蔵
4	『橋づくし』(第五版)	1958年(昭和33)	三島由紀夫 著 文藝春秋新社 発行	F	図書	個人蔵
5	歌舞伎座公演筋書より「橋づくし」	1961年(昭和36)		A	パンフレット	96004533
6	『文藝春秋』昭和31年12月号掲載「橋づくし」		三島由紀夫 著 文藝春秋新社 発行	A	逐次刊行	02605074
7	本年流行の中形浴衣地 広告	昭和初期		A	刷物	99002083
8	本年流行の中形浴衣地 広告	昭和初期		A	刷物	99002084
9	招き猫	昭和前期		A	芸能娯楽	88143652
10	今戸焼土人形 芸者	大正期～昭和初期	金沢春吉 作	A	芸能娯楽	94004255
11	『キネマ旬報』より「炎上」主演の市川雷蔵	1958年(昭和33)	キネマ旬報社 発行	A	逐次刊行	87521101
12	教育女中きせかへ	1917年(大正6)	一光 画	A	刷物	90208095
13	家族合	昭和前期		A	芸能娯楽	93006646
14	「橋づくし」の碑			A	写真パネル	
15	第1、第2の橋 三吉橋	昭和初期		A	写真パネル	
16	第3の橋 築地橋	昭和初期		A	写真パネル	
17	第4の橋 入船橋	昭和初期		A	写真パネル	
18	第5の橋 晝橋	昭和初期		A	写真パネル	
19	第7の橋 備前橋	昭和初期		A	写真パネル	
20	(東京大橋)三吉橋 絵葉書	昭和初期		A	絵葉書類	88138258
21	(復興の帝釈)築地三吉橋 絵葉書	昭和初期		A	絵葉書類	88138233
22	『復興記念写真帖』より 三吉橋と京橋区役所	1930年(昭和5)	東京府 発行	A	写真	88001269
23	都電・都バス・トロリーバス 東京都の交通案内	1959年(昭和34)	東京都交通局 発行	A	パンフレット	01002686
24	『新撰東京名所図会 第三十一編』より 月島の夜景	1901年(明治34)	東陽堂 発行	A	逐次刊行	94202207
25	『新版東京』第3号より 築地あかつき橋	1932年(昭和7)	武藤六郎 画	A	版画	99200017
26	東京千景ペン画スケッチ 聖路加国際病院 中央区	1981年(昭和56)	木村達次 画	A	洋画	86002113
27	京橋南築地鉄砲洲絵図	1961年(文久1)	尾張屋清七 版	A	地図等	86213135
28	火災保険特殊地図 中央区築地方面第二区	昭和中期	日本火保区株式会社 作成	A	地図等	87202147
29	築地本願寺本堂落成 慶讃法要の奉祝門 絵葉書	1934年(昭和9)		A	絵葉書類	88137885
30	築地西本願寺	1969年(昭和44)	森義利 画	A	洋画	91001766
31	築地本願寺全景	1988年(昭和63)	中尾良一 画	B	洋画	97002322
32	「橋づくし」の舞台	1951年(昭和26)	東京特別都市計画図 中央区(京橋)より作成 東京都建設局 監修	A	写真パネル	00002521
33	「橋づくし」鮫小紋本 秩より 築地絵図			A	写真パネル	個人蔵
34	出語り図 心中天網島	1784年(天明4)	鳥居清長 画	C	版画	89220121
35	実鏡色の美名家見 紙屋次兵衛 紀ノ国屋小春	寛政期	喜多川歌麿 画	F	版画	89204063
36	銀座五十年 夜景 四丁目から東劇方面	1939年(昭和14)	師岡宏次 撮影	A	写真	95651076
37	東京風景 歌舞伎座	1936年(昭和11)	ノエル・スエット 画	A	版画	91220503
38	歌舞伎座全景 絵葉書	昭和中期		A	絵葉書類	88002349
39	「女方」原稿	1957年(昭和32) 発表		B	原稿類	個人蔵
40	「女方」原稿(複製)	1957年(昭和32) 発表		E	写真パネル	個人蔵

No.	資料名	時代年代	作者等	展示期間	二分類	資料番号・所蔵先
41	『文学の街 名作の舞台を歩く』より ケーンヒスベルクの七つの橋	1991年 (平成3)	前田愛 著 小学館 発行	A	図書	個人蔵
42	『東京の人』を書き終えて」原稿	1964年 (昭和29)	川端康成 筆	A	原稿類	02301906
43	進藤純孝 (若倉雅郎) 宛書簡	1957年 (昭和32) 10月22日付		E	文書	02302814
44	『橋づくし』鮫小紋本	1971年 (昭和46)	三島由紀夫 著 牧羊社 発行	A	写真パネル	個人蔵
45	『橋づくし』鮫小紋本 三島家家紋入袱紗			A	写真パネル	個人蔵
46	家紋 丸に抱若荷紋			A	写真パネル	
47	『橋づくし』鮫小紋本 夫婦函			A	写真パネル	個人蔵
48	鮫小紋			A	写真パネル	個人蔵
49	『橋づくし』雪の巻	1971年 (昭和46)	三島由紀夫 著 牧羊社 発行	A	和装本	個人蔵
50	『橋づくし』月の巻	1971年 (昭和46)	三島由紀夫 著 牧羊社 発行	A	和装本	個人蔵
51	『橋づくし』花の巻	1971年 (昭和46)	三島由紀夫 著 牧羊社 発行	A	和装本	個人蔵
52	『橋づくし』すかし絵原本			A	刷物	個人蔵
53	『橋づくし』すかし絵原本			A	刷物	個人蔵

展示期間A：平成17年10月12日 (水) ～18年1月9日 (月・祝)

展示期間B：平成17年10月12日 (水) ～11月13日 (日)

展示期間C：平成17年10月12日 (水) ～12月11日 (日)

展示期間D：平成17年11月15日 (火) ～12月11日 (日)

展示期間E：平成17年11月15日 (火) ～18年1月9日 (月・祝)

展示期間F：平成17年12月13日 (火) ～18年1月9日 (月・祝)